

大島本『源氏物語』初音巻

——当初の本文——

藤 井 日出子

『源氏物語大成』（以下『大成』と略す）では底本について、「藤原定家ノ青表紙本ヲ以テ之ニ當テルコトトシ、花散里・柏木・早蕨ノ三帖ハ現存スル定家本」、他は「現存諸本中定家本ノ形態ヲ最モ忠実ニ伝ヘテキルト考ヘラレル大島本」を「用ヰタ」とある。ここには『大成』では青表紙本の基準が定家本であること、それに最も近い本文が大島本であるとの考えが示されている。しかし一方で大島本がこれを欠く「浮舟」以外にも、「補写」の「桐壺・夢浮橋」、「別本系統ノ本文」とされた「初音」（以下帖は「」とする）の三帖については、次の如く「但シ」として、「大島本に次グベキ地位ヲ有スレ池田本」を「用ヰタ」とある。なぜ「桐壺・夢浮橋」、「初音」などの巻は、検証がないまま不採用とされたのか。これらの巻は大島本とは扱われていないようである。さらに『大成』に採用された巻も、校異欄にしか当初の本文は記されていない。なぜ検証がないままに校訂後の本文があげられているのだろうか。これらの重大な問題を積み残したまま、『大成』に示された基準・考え方は現在まで引き継がれてきている。

現代の注釈書『古典セレクション』（以下「セレクション」と略す）では、底本は「数種の青表紙諸本」で「校訂」したとし、定家本は「花散里・柏木・早蕨」三帖が採用されている。次に明融本（定家本と重なる「花散里・柏木」を除く）七帖「桐壺・帚木・花宴・若菜上下・橋姫・浮舟」と伝定家筆本「野分」が採用されている。「夢浮橋」と「初音」は『大成』同様に池田本が採用されている。定家本を第一とする『大成』の基準が踏襲されていることが分かる。これに対して『新日本古典文学大系』（以下「新大系」と略す）では、「浮舟」一帖は池田本とし、他の帖「五十三冊」は「大島本を用いる」とする。ところが付録の「大島本の様態」を見ると、見セケチ・抹消については「後に加えられたと思われる補訂をも取り入れた」とある。なぜかここでも当初の大島本の本文は、詳しい検討がなされないまま退けられている。『新大系』でも大島本の本文は後の校訂本文が採用され、当初の本文の姿は見られないのである。こつしたことから現代の注釈書は、『大成』の基準をそのまま踏襲しているといえよう。それゆえ現在、当初の大島本の姿のままで読むことは行なわれなくなっている。こつした背景には、『大成』に示された定家自筆本が第一という基準が横たわっているからではないだろうか。

しかしはたして『大成』の示す基準は、基準たり得るのであるうか。現在「花散里」については定家自筆本は底本として疑われることがない。ところが先に当初の大島本¹「花散里」を検討したところ、諸本が麗景殿「女御」とする二箇所が、当初の大島本ではともに「女」とあった。当初の大島本のみ本文であり、前後の語法・文の叙述などを検討したところ、全く問題がなかった。そこで本文の内容について全体の検討を行なった結果、これまで齟齬があるとされていた花散里についての矛盾がまったくなくなることが分かった。当初の大島本によれば、それ以降の巻とも連続・矛盾なく繋がっていつているのである。すなわち花散里という人物について、当初の大島本では定家本・他の青表紙本諸本と異なり、「花散里」から既に女主人公としての位置付けがなされ

ている。二箇所の大島本のみ「女」とある箇所は、花散里という人物像に関わる重要な本文であったのである。こつした結果から、当初の大島本が源氏物語の重大問題についても、それをを解決し得る可能性を秘めた本文であることが分かった。

—

そこで本稿では、これまで別本系統の本文であるとされてきた当初の大島本（以後大島本とする）「初音」の補訂箇所を取り上げて、その本文の姿を明らかにすることを試みる。なお今回は角度を変えて、補訂箇所の当初の大島本「初音」の表記・助詞・語句などについて、すべて大島本「源氏物語」全体を通して本文の中に位置付けてその整合性を問うことにする。これにより、当初の大島本「初音」が大島本「源氏物語」の中に位置付けられるか否かが明らかになるであろう。

大島本の補訂箇所を検討するにあたって、次のように表にした。上段から順に、丁数行、大島本の本文、それに一致する諸本名、補訂後の大島本の本文（「大島本（補）」とする）、それに一致する諸本名をあげた。なお補訂本文については、時代的な差違、朱墨などの相違、漢字仮名の区別は問わない。³

番号	丁数行	大島本	大島本に一致本	大島本（補）	大島本（補）に一致本
1	一才8	御方くゝの御まへのあり さまとち	麦阿	御方くゝのありさま	池御當日伏穂前高平尾陽

14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2
七ウ10	七オ4	七オ4	七オ2	六ウ10	六ウ10	六ウ6	六オ9	五オ10	四ウ1	二オ5	二オ3	一ウ8
なさけやけし	まちてたる	ふるすをとつる	あはれる	さえかゝす	さつかちなとも	しゝう	上風	こゝこそ	きかはし	御さま	いはひ事とも	もてつけて
		麦池御高尾		池日麦阿池伏高尾				保		保東		保東
なまけやけし	まち出たる	ふるすをとへる	あはれる	されかゝす	さつかちなとも	しゝうを	追風	こゝこそ	きこえかはし	御ありさまを	いはひ事ともかな	めやすくもてつけて
池肖日伏穂高平国保東尾 麦阿陽	池御肖日伏穂前高平国保 東尾麦阿陽	肖日伏穂前平保国阿陽	池御肖日伏穂前高平国保 東尾麦阿陽	肖前国陽	肖日前国平陽	池肖日伏穂前高平国尾麦 阿陽	池御肖日伏穂前高平国保 東尾麦阿陽	池肖日伏穂前高平国東尾 麦阿陽	池御肖日伏穂前高平国保 東尾麦阿陽	池肖日伏高平国尾麦阿陽	池御肖日伏穂前高平国保 尾麦阿陽	池御肖日伏穂前高平国尾 陽

25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15
一二ウ9	一二ウ5	一二オ9	一一ウ1	一〇ウ10	一〇オ9	九ウ8	九オ7	八ウ7	八オ7	八オ6
思給へしられける	むつひ	仏の御かさり	さへき	御そものなと	かさねのうちき	日かすすくして	へたて	心などの	りひしかく	御とのこもり
東 麦阿陽	御肖日伏前高平国保東尾	御保東尾		池伏穂高	池御肖日伏穂前高平国保 東尾麦阿陽					池肖日伏穂高平国保東尾 麦阿陽
思給へしられ待ける	御むつひ	経仏の御かさり	さるへき	御そもの事なと	かさねのきぬ	日ころすくして	へたてて	心など	りむしかく	とのこもり
尾麦阿陽	池御肖日伏穂前高平国保	陽 池肖日伏穂前高平国麦阿	池御肖日伏穂前高平国保 東尾麦阿陽	御肖陽		池御肖日伏穂前高平国保 東尾麦阿陽	池御肖日伏穂前高平国保 東尾麦阿陽	池御肖日伏穂前高平国保 東尾麦阿陽	池御肖日伏穂前高平国保 東尾麦阿陽	池御肖日伏穂前高平国保 東尾麦阿陽

26	一三才3	一本おもふたのむとのたまふ		おもふとのたまふ	池御肖日伏穂前高平国保東尾麦阿陽
27	一四才2	さまくまねく		さまくあまねく	東
28	一五才3	したかさね	国保東尾麦阿	しらかさね	池御肖日伏穂前高平陽
29	一五才7	君たちそこらにすくれて	池肖日伏穂前高平国保東尾陽	君たちそこらにすくれて	御麦阿
30	一五才10	ゑに	保東	ゑにも	池御肖日伏穂前高平国尾麦阿陽
31	一五ウ4	霞のなかと	保	霞のうちかと	池御肖日伏前平国麦阿
32	一五ウ5	さるはかうこむしのよはなれ	御保	さるはかうこしのよはなれ	肖日伏高国尾
33	一五ウ6	一本かうさしのいとともよはなれたる		さるはかうこしのいとともよはなれたる	
34	一五ウ9	ひやうしにも	保東	ひやうしも	池肖日穂平国尾陽
35	一六才1	えかへり給はず	保	かへりわたり給ひぬ	池肖日穂平国麦阿陽
36	一六ウ3	うるせかめり		うるせかめり	御肖日伏前高平国保東尾阿陽
37	一六ウ10	心をつくし	保東	心けさうをつくし	池肖日伏穂高平国尾陽

以上の例から見ても、大島本は他の本文とは表記・助詞・語句などが相当異なっていることが分かる。補訂されている本文は大部分が現存する諸本に一致するが、文中に混入している26・33の例からは、現存する諸本には

ない本文も見られる。補訂箇所は本文のいずれかをめぐって解釈が分かれていく部分ゆえに、様々な本文が見られるのである。一方こうした興味深い事実は、角度を変えて見ると大島本「初音」がまったく異なって見えてくることを窺わせていよう。そうであれば補訂箇所の部分を本文に従って読み解いていけば、いずれの本文が『源氏物語』に沿った本文であるかが明確にできるのではない。そこでこれらの補訂箇所を、次のように働きによっていくつかに分けた。本稿では、分類のうちABCを論ずる（Dについては、別に後考する）。

A 書風・表記（7・16・32・22・5・11・13）

B 傍記の混入（26・33）

C 助詞など文法的な相違（3・6・8・9・17・18・30・31・34）

D 語句などの相違（1・2・4・10・12・14・15・19・20・21・23・24・25・26・27・28・29・33・35・36）

37

Aから順次、検討をしよう。

A 大島本の書風・表記

大島本「初音」には、他の諸本と異なっている書風・表記が散見される。こうしたことは何に起因しているの
であろうか。

書風について

7では、大島本以外の諸本はすべて「追風」である。光源氏が年賀に明石の君を訪問する。すると御簾の内から薫風が優雅に漂ってくる。そうであれば、諸本の如く「追風」とすべきであるが、大島本では「上」とも「追」

とも見分けのつかない草体で書かれ、傍書に「追」とある。親本が「上」によく似た「追」の草体だったからである。「上」と見間違われなかったために、「追」を傍書したのである。7では、大島本は再度「追」を傍らに記したにすぎない。16「りひしかく」は諸本はすべて「りむしかく」である。「りひしかく」とする例はこのみであり、あるいはここも親本の「む」が「ひ」によく似ていたから、それをそのまま書写したものである。7・16は、大島本が親本の書風や表記をよく伝えていることが分かる部分である。それゆえ、ともに諸本との異同を示す箇所ではない。

表記 音便 について

32では大島本は、「高巾子」を「かうこむし」（「傍記の混入」でも後述）、保坂本・東大本は大島本の「む」を「ん」として「かうこんし」、他の多くの諸本はこれを表記せず「かうこし」とある。こうした大島本が「む」と表記する用例は「初音」にも次のように数多く見られる。「たるましくなむ」（一〇九）、「あらむかし」（二〇三・三才・10）など、数箇所を除き「む」の表記である。多くの諸本も大島本の「む」に一致する場合が多いが、「ん」の表記の場合もある。こうしたことは、大島本・多くの諸本が「む」の表記を伝えているということである。32では大島本は「む」の表記を伝えて「かうこむし」とし、諸本はこれを伝えず「かうこし」としたために、大島本と諸本との本文とが異なっているのである。

22大島本「さへき」は音便「さんへき」の「ん」が無表記になっているが、諸本では「さるへき」とある。大島本でもほとんどの例は「さるへき」と表記されており、「このように「さへき」と表記するのは五例のみである。⁴一方大島本が「さへき」とする他の用例を見ると、「若紫」は池田本・御物本・国冬本・日大本・穂久邇文庫本・

伏見天皇本、「行幸」は国冬本、「橋姫」では陽明本・国冬本・言経本などと一致している。諸本も、こうした「さへき」とする表記を伝えているのである。大島本の五例は全体に亘っており、これらのみを音便「さへき」にした理由が見あたらない。22は、大島本は親本が伝える「さへき」をそのまま伝えている部分であろう。

表記 平仮名 について

5 「きかはし」、11 「あはれる」、13 「まちてたる」では、いずれも語法的に成り立たず、かつ意味も取れない。そこでそれぞれを前後の本文から考えてみたい。

5 は、大島本では「きかはし」とあるが、諸本は「きこえかはし」または「聞えかはし」とある。前後の本文を見ると、大島本では「いとむつましくありかたからむいもせの契はかりきかはし給ふ」とある。この箇所は諸本の異同は、「ちぎりばかり」を「ちぎりばかりに」穂陽 とある以外に語句の異同はない。光源氏が新春の祝いに花散里を訪れた段である。前文に「いまはあなちにかやかなる御ありさまにももてなしきこえ給はさりけり」とあり、光源氏は花散里に対して褥を共にする気持ちがないことを記している。そうであるから、「いとむつましくありかたからむいもせの契はかりきかはし」と、めったにない仲睦まじい夫婦程度の語らいを交わすというのである。「きこえかはし」とあるべきにもかかわらず、なぜ大島本には「きかはし」とあるのか。大島本の親本は「聞かはし」とあり、「聞」を「きこえ」と読ませる本であったと推測される。これを大島本書写者が仮名にする際に、「聞」を「き」と読み、仮名にして「き」「かはし」と表記したのである。5 大島本「きかはし」は、親本では「聞かはし」と表記されていたことが分かる箇所である。

5 大島本「きかはし」は、親本では本来「聞かはし」であったのである。それゆえ5 大島本「きかはし」は、

諸本「きこえかはし」と対立する本文ではなく、大島本書写の際に親本の漢字「聞」を「き」と読み記したために、意味のとれない語句が発生したのである。こうしたことから大島本では、親本の漢字を仮名表記にする試みが行なわれたことが推測される。

11は、大島本では「あはれるふることゝもかきませて」とある。大島本が「あはれる」とある以外は、諸本は「哀なる」または「あはれなる」の表記である。明石の姫君からの御返事「小松の御かへり」があつたので、それに対して明石の君が古歌「あはれるふること」を加え入れて、さらなる御返歌をしたためたのである。大島本でも当然「あはれなる」とあるべきであろう。なぜ、意味もとれない「あはれる」となっているのか。5の場合と同様に、大島本の親本は「哀る」とあり、「哀」を「あはれな」と読んでいたのであろう。これを大島本の書写者が「哀」を「あはれ」と読み、これを「あはれ」る」と表記したといつことであろう。やはりこの「あはれる」についても、諸本の「あはれなる」と対立する異文ではなく、漢字から仮名表記にする際に問題が生じた部分である。

13についても、5・11同様の問題と考えられる。大島本「まちてたる」、諸本は「まち出たる」または「まちいてたる」の表記である。大島本も諸本の如く「まちいてたる」と表記すべき箇所である。大島本の他の一二例では「まちいて」と表記されている。一方大島本には他にも次のように、こつした同種の表記例が見られる。「心にまかせていひて給へるも」(若菜下「九」才・8)とある。「口に出す」意だから「いひいて」とすべきだが、「いひて」と表記されている。他の一二例は「いひいて」、「三例は「いひ出」とあるところから、親本は「いひ出」とあつたようである。やはりこの例でも、親本「いひ出」の「出」を仮名にする際に「で」と読み、これを「て」と表記したと考えられる。すると大島本の親本は「まち出たる」であり、大島本は仮名で「まちいてた

る」と表記すべきであったのである。13の大島本「まちてたる」は、諸本「まち出たる」と対立する異文ではなく、大島本が親本の漢字から仮名表記にする際に問題が生じたのである。

Aは、大島本が親本の保持する書風・表記をそのまま伝えていたことが窺える箇所である。親本の筆や古い表記などを伝えているゆえに、他の諸本とは本文が異なっているのである。一方、大島本は親本の漢字を仮名表記にすることを試みていることが窺える。その際に漢字を誤って読んだ箇所が散見される。

B 傍記の混入

大島本では、26は「一本おもふたのむとのたまふ」として、「一本」と「たのむと」が抹消されて」とが補入されている。また33は「かうこむしのよはなれ一本かうさしのいともよはなれたる」として、「かうこむし」の「む」と「一本かうさしのいともよはなれ」がともに抹消されている。両者に見える「一本」は、叙述には関わりのない語であるところから、親本の傍記が混入していると分かる。26では、親本「たのむとのたまふ」の「たのむ」に「一本」として「おもふ」が傍記されていたのである。これを書写者が、これら傍記部分をすべて本文に書き入れたのである。一方こうした部分を除くと、26では大島本の親本には本来「たのむとのたまふ」とあったと分かる。33でも、親本には「かうこむしのよはなれ」に異本が「一本」として「かうさしのいともよはなれ」と傍記されていたのである。これを書写者がこれら傍記部分をすべて本文に書き入れたのである。こうした傍記部分を除くと33は、大島本の親本には本来「かうこむしのよはなれたる」とあったと分かる。

26は、大島本は本来「たのむとのたまふ」と書写されるべきであったのである。そこでその前後の本文を見ると、光源氏は新年の挨拶に尼になった空蟬を訪ねる。勤行に励む空蟬に当時の薄情な仕打ちゆえの「世のむくひ」

だと言つ。諸本では「おもふとのたまふ」とあるから、光源氏は空蝉に辛辣な言葉を浴びせる（「セレクション」）のである。諸本の如く「おもふとのたまふ」とあれば、その解釈せざるを得ない。ところが大島本「たのむとのたまふ」であれば、事情は違つてこよう。「たのむ」と懇願・お願いをしているのは、光源氏だからである。大島本の本文については、前文を含めたこの箇所全体の再検討が必要になる（これについては、D語句などの相違であらためて論ずる）。26は、大島本書写者が親本の異本注記を本文中に入れて書写したために、本文に問題が生じたのである。そうではあるが、親本が諸本と異なる「おもふとのむ」であり、校合本文は諸本の如く「おもふとのたまふ」であつたと分かる部分でもある。

33は、大島本は本来「かうこむしのよはなれたる」と書写されるべきであつた。この大島本の親本本文「かうこむしのよはなれたる」は御物本・保坂本にも見える。一方親本が「一本」とする異本「かうさしのいとよはなれ」とする本文は、前田家本にも異本として注記されているが、現存する諸本には見られない。

こうした親本の異本注記が「一本」として大島本に混入している例は、他には見られないことから、26・33の二例は大島本書写者が誤つて、傍記を本文に入れたと考えられよう。一方大島本のこうした書写を通して、この箇所の大島本の親本の姿を窺い知ることができ、大島本の本来の本文も復元できる。大島本は、親本の本文や姿を伝えていることが分かる。

C 助詞などの相違

大島本と他本との助詞の相違を検討する。

3は、大島本は「いはひ事とも」、諸本は「いはひ事ともかな」とある。「とも」と「ともかな」との差異はあ

るだろうか。大島本の前後を見ると、春の御殿で女房達が新春の「いはひ事ともしてそほれあへる」所に光源氏が顔を出す。「はしたなきわさかなとわひあへり」とあり、見られた女房達は困って恥ずかしがっている。すると光源氏は女房達にその「いとしたゝかなる」「みつからのいはひ事とも」を、「みなをのゝ思ふ事の」「みちゝあらむかし」として、「すこしきかせよや」と言っているのである。すると自信のある「中将の君」は、私事ではなく光源氏の長寿の祈りだと申し上げる。大島本では、女房達の「そほれあへる」「いはひ事とも」の内容を問う光源氏に中将が応えるという一連の叙述になっている。ところが諸本の如く「いはひ事とも」「かな」とあれば、光源氏は女房達の寿詞を聞いた早い段階から、皮肉たつぷりに「朋輩どうして祝福しあつていることをからかう」「セレクシヨン」つもりで「いはひ事ともかな」と言った後で、「すこしきかせよや」と言ったことになろう。大島本はこうした状況や光源氏の内面を読者の想像に托しているのに対して、「かな」を加えた諸本は光源氏の内面に立ち入った解釈をしている本文と言える。

6は、玉鬘の容貌について、大島本は「花やかにこゝこそくもれる」、諸本は「花やかにここそくもれる」とする。係助詞「こそ」と「そ」の相違であるが、「こそ」は「そ」「なむ」よりも強調の度が強いとされている。これに続く後文と合わせると、大島本は「花やか」で「こゝこそくもれる」とみゆる所³がないこと、それが玉鬘の美の特性だと言っているのである。大島本の「こそ」は、玉鬘の美しさが「くもれる」とみゆる所³のない点であることを強く印象づけている。

8は、大島本は「しゝうくゆらかして」、諸本は「しゝうをくゆらかして」とある。大島本は「を」がなく、諸本はこれを有する。4でも同様に、大島本は「御さま」、諸本は「御ありさまを」とある。他の多くの箇所では、大島本も諸本同様に「を」を有するにもかかわらず、なぜ「を」を有しない例があるのだろうか。大島本の

他の「を」を有しない例は次のようである。 「ひめ君」もなき御ありさまおとゝのきみもおほしあかめ

(「胡蝶」五才10)、 「御さま露はかりうれしとおもふへきけしき」(「竹河」一三才5)、 「人の御さま見な

らひ給なよ」(「総角」三三才7) などである。これら三例について、では、「御ありさまを」とするのは御物

本・麦生本・阿里莫本・河内本、大島本や多くの他の諸本は「御ありさま」である。は、「御さまを」とする

のは言経本のみで、大島本や多くの諸本は「御さま」である。は、「御さまに」とするのは阿里莫本・中京大

本、大島本や多くの諸本は「御さま」である。このように大島本や多くの諸本には、格助詞「を」を省略する例

が見られる。これらは、大島本や諸本が「を」を有しない本文を伝えている箇所であろう。そうであれば、4・

8も、大島本が親本の「を」を有しない本文を伝えているのであろう。

9は、大島本「さつかちなとも」「さえかゝす」、諸本では「さつかちなにも」「されかゝす」とある。「さつかちなとも」と「さつかちなにも」とは差異はあるのだろうか。大島本の前後を見ると、光源氏は明石の君の書を見て「ゆへある」「かきさま」で、「さつかちなとも」、いかにも仰々しく「さえかゝす」・「めやすく」と言うのである。光源氏は明石の君が「さつかち」「なとも」「さえかゝす」だから、「めやすく」と評価しているのである。同じ「初音」の9以外の「なとも」の用例を検討しよう。 「御くしなともいたくさかり過にけり」(四ウ³)、 「こゑまちてたるなとも」(七才4)、 「御こゑなともいとさむけに」(一〇ウ⁸)、 「あかの具

なともおかしけに」(一二才9)、 「殿上人なとも物の上手おほかる」(一四才⁸)、 「色あひなともあけほの

空に春のにしき」(二五ウ²)がある。「なとも」は、花散里の髪、古歌、末摘花の御声、あかの具、

殿上人、色あひをそれぞれ指している。大島本では、「なとも」は「は」の意に近い。これに対して「なとに

も」は、大島本「初音」に「あなたなにもわたり給へかし」(六才²)、と光源氏が玉鬘を春の御殿「に」「も」

出かけるよう誘う一例がある。夏の御殿にいる玉鬘を、加えて春の御殿に「も」と誘っているのである。「な」とも「な」とにも」とはまったく異なる場合に用いられている。「さつかち」については、諸例から、草体の意と分かる。それゆえ大島本では「この草体」「さつかち」は、本来「さえ」書くようなものではないとして「かゝす」と言っているのである。この大島本「さつかちなともさえかゝす」は、『源氏物語』の諸例とも矛盾しない。これに対して諸本では「さつかちなにも」としたので「されかゝす」とあるのだから、明石の君の筆跡を評価したことはない。9は、大島本の「なとも」の方が『源氏物語』の用法にかなっている。

17では、大島本は「おもふ心などの物し給ひて」、これに対して「の」を有しない諸本は「おもふ心なと物し給ひて」とある。大島本の前後の本文を見ると、若い上達部などが玉鬘を「おもふ心なと」「の」あると言っているのである。大島本では次のように、「心」が主語になる場合にはこれに格助詞「の」を付している。「心のありてきこえ給けるに」(『絵合』六才4)。「心のとまる世なくこそありけれ」(『須磨』一四才9)、などの例がある。このうち、では多くの諸本も大島本と同様であるが、では多くの諸本は「の」を有しない。このように多くの諸本には、「の」を付さない例も見られる。こうしたことから、大島本は「の」を有する本文を伝えたのに対して、諸本は何らかの事情から主格の「の」を省略したと見られよう。

18では、大島本は「へたて」、諸本は接続助詞「て」を加えて「へたてて」とある。両者の差異はあるのだろうか。大島本の前後の本文を見ると、年始のにぎやかな「車のをとを」、花散里・明石君などの御方々は、遠く離れてすなわち「へたて」聞いていらっしやるのである。以下に大島本と諸本とが一致している「へたて」と「へたてて」の用例をあげよう。まず「へたて」は「ちみさき山をへたてのせきに見せたれと」(『胡蝶』二才1)。「いまはこよなくへたてきこえ給をいとをしき」(『女』二〇ウ8)と、山や心に大きな隔てがあるとしている。

一方「へたてゝ」は「御木帳はかりへたてゝきこえ給ふ」（「初音」一四六）とある。玉鬘が春の御殿で御几帳だけを「へたてゝ」、明石の姫君と対面したというのである。他の用例でも、「へたてゝ」は几帳を間におく程度の場合に用いられている。二例の「へたて」、一例の「へたてゝ」の用例については、大島本が多くの諸本とも一致していることから、「へたて」と「へたてて」の差異は、隔たっている距離の大きさといえようか。なおこうした微妙な表現の使分け書分けは、作者にのみよくなし得ることである。18では、大島本がこうした作者に關わる語句の差異を明確に伝えている部分であろう。そうであれば18は、大島本「へたて」の方が、こうした表現の差異を伝えていて理がある。

30では、大島本は「ゑに」、諸本は係助詞「も」を加えて「ゑにも」とある。「も」の有無による差異はあるであろうか。大島本の前後の本文を見ると、「竹河」を謠って群れて寄り合つ、「なつかしきこゑく」が「ゑに」「かきとゝめかたし」としている。男踏歌の心ひかれる声は「ゑに」描きとどめにくいというのである。これに対して、諸本では「絵にも³⁰」とあるので、その「群れてゆく姿や、思いをそそる声々は、絵にも描き残すことのできないのが残念」（「セレクション」）、と男踏歌全体を評価している解釈がされている。男踏歌があまりにすばらしいゆえに絵にも描きとどめにくい。両者のうちいずれが叙述上理にかなっているであろうか。大島本では、前文には六条院で行なわれたゆえに「所からにやおもしろく心ゆき」とある。一方、後文には「おこめきたる事をことくしくとりなしたる中く、なにはかりのおもしろかるへきひやうしにもきこえぬ」とまったく逆の叙述がある。男踏歌は、後文では評価されていないばかりか、前文でも六条院で行なわれたがゆえに、声に対する一定の評価がされているのである。まったく絵にも描けないほどすばらしい男踏歌とは言っていないことが分かる。「絵にも」とするのは、その前文後文とも矛盾する本文である。それにもかかわらず、「絵にも」「かきとゝめか

たし」と、諸本が「絵」に「にも」を付したことは、本文の流れからいけば誤りと言わねばならない。大島本の如く「絵に」とあるのが叙述の流れとも矛盾がない。

31では、大島本は「霞のなかと」³⁾、諸本は疑問の係助詞「か」を加えて「霞のうちかと」とある。ここは本来「中と」であったようだが、これを平仮名表記にする際に、大島本・保坂本の如く「なかと」と陽明本・東大本の如く「うちと」に分かれたと推測される。しかしさらになぜそれぞれに「か」が加わる高松宮本「中かと」、他の多くの諸本の如く「うちかと」とする本文が存在するのであるうか。まず大島本の「なかと」の本文を検討する。大島本の前後の本文を見ると、六条院春の町に集う女君達、その殿舎からはいずれ劣らぬはなやかな「袖くちとも」が御簾の下から見えている、それはまるで「あけほのく空に春のにしきたちいてにける霞のなかと」「見へわたさる」と言つのである。この箇所は「みわたせば柳桜をきまませて宮こそ春の錦なりける」(『古今集』卷一春上・五六・素性法師)が、『休聞抄』以来引歌として指摘されている。『古今集』の「みわたせば」・「柳桜をきまませ」・「春の錦」は、大島本ではそれぞれ「見へわたさる」・「袖くちとも」の色目・「春のにしき」を重ね合わされている。一方大島本には『古今集』に見えない新たな「たちいてにける霞」の本文が加わっている。『古今集』の場合についても、歌には書かれていないけれども、春の錦は「霞」が「裁った」のだと。作者は、この場面を描くために、ここにこうした新たな発想のもとに引歌を取り込んだのだと断じているのである。そうであれば「中かと」「うちかと」では、作者の意図からずれる。疑問の余地はない。31は、大島本の如く「なかと」とあるのは「中と」・「うちと」のいずれかである。

34は、大島本は格助詞「に」と係助詞「も」を加えて「ひやうしにも」とあり、多くの諸本は「に」を有しない。「ひやうしも」あるいは「はうしも」とある。「に」の有無による差異はあるのだろうか。大島本の前後の本

文を見ると、「さるは」として男踏歌の一行について最後のまとめがなされている。まず「高巾子」が世間離れしているとして「よはなれたる」と言う。さらに寿詞は「みたりかはし」く、馬鹿らしい事をいかにも「ことくしく」していると言つのである。そのために「中く」「さほど」「おもしろかるへき」「拍子にも」「きこえぬ」のだと。一方「おもしろかるへき拍子」とあることから、本来「拍子」は面白くという事が前提にあることが分かる。同じ「初音」に、楽の調べがおもしろく「此殿うち出たるひやうし」が「花やかなり」と評価されている。これに光源氏が声を添えなざる「さき草の末つかた」は「いとなつかしくめてたく」「きこゆ」（九才こ、とさらに高い評価がされている。この他にも『源氏物語』では通例、「拍子」が加わると、「おもしろし」・「おかし」「なまめかし」などと評価する言が添えられている。そうであれば「初音」で、「高巾子」を付けた奇矯な姿や馬鹿らしい寿詞ゆえに、当然「おもしろかるへき」「拍子」が、本来の「拍子」にも「と聞こえなかつたと言つのは理になつてゐる。これに対して諸本が、「拍子も」とするのはなぜであるつか。「高巾子」を付けた姿や寿詞の騒々しく馬鹿らしい事をおおげさだと言つのは大島本同様である。次いで「中く」「なにはかり」「おもしろかるへき」「拍子も」「きこえぬ」のだと言つ。「拍子も」とあるのは、「高巾子」姿や寿詞などと同様に「拍子も」であるのである。すなわち「きこえぬ」のは、「高巾子」姿や寿詞などと同様に「拍子も」酷評される内容だつたと言つわけである。それゆえに「中く」なにはかりおもしろかるへき「拍子も」「きこえぬ」のである。諸本の「拍子も」は、「拍子」の声が姿・寿詞同様に悪いゆえに面白く「きこえぬ」と推測する外ない。しかし諸本の如くここで「拍子も」面白く聞こえなかつたといふ本文は、『源氏物語』では「拍子」が面白く聞こえなかつた用例が見られないことと、矛盾齟齬をきたしている。諸本の「拍子も」は、『源氏物語』全体に照らし合わせて見ると、無理がある本文である。諸本では、物語では「拍子」が面白くということが大前提であるにも

かわならず、これがふまえられていないといえよう。

「に」の有無による差異は明らかである。諸本の「拍子も」は、「拍子」についての無理解が生んだ解釈から発生した本文と考えられる。これに対して大島本「初音」の「拍子にも」は、大島本『源氏物語』全体における「拍子」の用例との矛盾がなく、男踏歌を熟知した本文である。そうであれば、34の大島本「拍子にも」が「拍子も」より古い本文であることは言つまでもない。

まとめ

- 一 大島本では一見「追」が「上」に見え、あるいは傍書混入などがあるのは、親本の書の姿をよく伝えようとしているからである。
- 一 大島本は親本の漢字を仮名表記に試みた形跡がある。その際に読み誤りがおきているが、親本と大島本の本来の書写すべき姿を復元することは可能である。
- 一 助詞について、大島本が他本と相違する補訂箇所を見ると、大島本の助詞の用法は大島本『源氏物語』全体のと照らし合わせても誤っている箇所は見られない。むしろ他の多くの諸本の方が『源氏物語』全体における用法と矛盾したり誤ったりしている。こうした助詞の使い方は『源氏物語』作者に関わる微妙な問題であることが原因にあげられよう。大島本は作者のみがよく使分け書分けられると考えられる本文を伝えられているのである。こうしたことから大島本は、多くの諸本よりも古い形を保持した本文を伝えているということになる。一方これに対して諸本によつた補訂後の大島本の本文が、大島本と言えない本文になつてい

ることは言うまでもない。

大島本「初音」の補訂箇所を表記や助詞は、大島本『源氏物語』全体の用法とも合致し、古い用法を伝えていることが明らかになった。これまで大島本「初音」は別本とされてきたが、そうではなく大島本全体の中に位置付けられる巻であることが分かった。これまでの考えをあらためたい。大島本「初音」が検討に値する巻であることが分かったので、次にはDの部分を考察したい。

注

- (1) 大島本の本文は『大島本源氏物語DVD ROM版』（角川学芸出版）により、諸本については『源氏物語別本集成』・『源氏物語別本集成続』（おうふう）によった。
- (2) 私稿「大島本花散里巻の再検討」「花散里」をめぐって」、『中京大学文学部紀要』第49巻第1号（二〇一四年一〇月）
- (3) 「しつみ」の「つみ」に傍書「ほれい」としてこれを削除（5ウ1）、「すそ」に傍書「すそい」としてこれを削除（5ウ3）するなど、傍記がすべて削除されている例は検討の対象から除いた。
- (4) 他に四例「ほとへてさへきにおはしまさは」（「若紫」五二才8）、「もてなし給へはさへきよひなとものこしにてそ」（「末摘花」二ウ9）、「さへき人くにもたちをくれ」（「行幸」九才7）、「こゝにはさへきにやたゝいとひはなれ」（「橘姫」一四ウ7）が見られる。残る二六一例は「さるへき」である。
- (5) 藤本孝一氏からは「直したことは確か」で「こゝこそ」の「可能性がある」とのご教示をいただいた。保坂本は「こゝこそ」、御物本は「と」を加えて「こゝこそ」とある。「こゝこそ」とする本文は大島本を加えると三本になる。なお『源氏物語別本集成』や『新大系』は「こゝこそ」とする。
- (6) 「なと」は語源が「なにと」で、「なんと」になり「ん」が表記されなくなったとされている。諸本が「なとち」とする

部分を大島本では「御文なとんたえまなくつかはず」「薄雲 一一才6」のように、「なとん」と表記されている例が数例見られるように、大島本の「なとも」は本来「なとん」であったと推測される。

(7) 一つは「さうかちにうちませみたれたるも人のほとにつけてはをかし」「乙女 四三才3」と、光源氏が当時を回想して送った歌への五節の返歌を見た光源氏の感想である。五節の筆跡は「さうかちにうちませみたれ」ていたが、光源氏は五節の身分からいつてそれもよし、むしろ興味深いとしている。ところがもう一例では「いとさうかちにいかれるてのそのすちともみえずたよひたるさまもしりなかに」(常夏 二五才6)と、近江君の「いとさうかち」に対して批判している。すなわち草体「さうかち」は、「いかれるて」や「たよひたるさま」や「しりなかに」書いてはいけないと言っているのである。

(8) 『岷江入楚・細流抄』(『古注集成』)などは、「ゑにもきとめかたからんこそ」と、多くの諸本に一致する「ゑにも」の本文を項目にあげている。それにもかかわらず、「声はゑかきかたきと也」と、「ゑにも」の本文では困難な注釈を付している。三奈西家ではこうした解釈を伝えているのであろう。なお男踏歌は円融天皇の天元元六年(九八三)で中絶した。作者の誕生を九七八年とすれば、六歳である。見ていた可能性がある。そうでなくても、作者は実際の様子を知る人から聞くことができた時代にいた。

(9) 傍記について、『新大系』は「うち」の下方に消し跡、「別本集成」は「うちそ」削除とする。藤本孝一氏からは「うちか」として「か」を擦り消す「のご教示をいただいた。本文「なかと」の「な」のみが抹消されており、傍書が「うちか」であれば、「うちかかと」となり、「か」が重なるゆえに擦り消されたと考えられ、藤本氏のご教示によった。

(10) 霞に様々な色合があることについては、鈴木美恵子氏『古今和歌集 一〇二番歌の霞の色』(『名古屋平安文学研究会会報』二七・二〇〇三年三日)に詳述されている。それゆえ作者はここで、「霞」が「春の錦」を「たつ」という発想を得られたと考えられる。飛鳥井雅経が「かすみたつ春のにしぎのりを見よ柳さくらをたてぬきにして」(『明日香井和歌

集 五三九（歌の引用は『新編国家大観』）、と詠じられたのは、「初音」の当該場面をも取り入れているからである。

(11) 『セレクシオン』でも、「なかなか何ばかりのおもしろかるべき拍子も聞こえぬ」として、「どうもこれといっておもしろく聞かれるような曲節でもなかったのだが、と拍子の内容を批判する訳がされている。